

公園内の樹林地管理のあり方について

日本データサービス株式会社
緑地計画室 笠 康三郎

1. はじめに

これまでの都市公園整備の進め方では、施設整備や修景材料の植栽を終えるとハード的には完成したことになり、一般に供用された後はそれらの維持管理に主眼をおいた公園管理がなされてきた。しかし、近年特に都市内の残存樹林や都市近郊林において公園整備を行う事例が増えるにつれ、公園という緑地空間のあり方そのものが問われると同時に、それを構成する樹林や林床植生、生き物環境に対する正しい評価と、それに対する働きかけの十分な検討が不可欠になってきている。

それは同時に、工事的な意味での公園の完成と、緑地空間としての公園の完成とが大きく異なっていることを示しており、これまで行われてきた公園管理の内容についての再検討を行うよい機会ではないかと考えられた。

今回紹介する事例は、公園内の樹林や林床管理のあり方を具体的に検討すると同時に、それらの取り組みを開園前から一般市民に公開することによって、将来の運営管理につなげる方法を模索しているものであり、これからの公園整備や管理のあり方、市民参加の進め方などの参考になれば幸いである。

2 対象地の概要

道南圏道立広域公園は、北海道緑のマスタープランによって全道に配置される18の広域公園のうち、道南圏初の道立公園で、函館市郊外の丘陵地に面積約65haで整備が進められており、2003年夏に一部供用開始を目指している。

対象地の大部分は、戦後一時開墾され畑として利用された後、スギやカラマツを植林されたまま放置された人工林によって占められているが、沢に沿って比較的自然植生が残された区域、かつての谷地田で現在はスゲ栽培が行われている区域、畑地、草原など、多様な自然環境を有している。

平成10年度に実施された環境調査では、ブナこそ欠けているもののサワグルミやオオバクロモジ、ムラサキシキブといった道南地方特有の樹木や、エビネ、サルメンエビネ、アツモリソウ、ベニバナヤマシャクヤク、フクジュソウなどの希少植物、オオバナノエンレイソウ、キクザキイチゲ、スズラン、ミズバショウ、トリアシショウマ、チゴユリなどの多様な植物の生育が確認されている。(1)

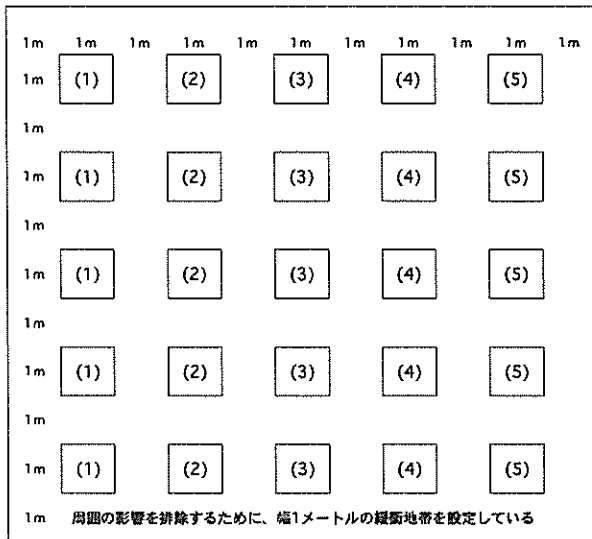
3. 公園内樹林整備の方向性

整備計画を検討するにあたって、樹林地に対して次のような課題があげられた。

- 1) 半分近くを占めている人工林は、手入れが全く行われなまま放置され、樹林として極めて不健全な状態になっていることから、順次間伐や枝打ちなどの森林施業が必要であること。
- 2) 短期間に大面積の間伐等を行うと大量の植物廃材が発生し、園外搬出による産廃処理が必要になることから、チップ化や堆肥化などによって極力園内での処理を可能にするために、バックヤードの整備と年次計画による樹林管理が必要であること。
- 3) 様々な植物が確認され、公園内の植生として価値は高いと考えられるが、クマイザサが密生している区域が大きく広がり、ササの被圧を受けて植生が単調になっているため、部分的にササの処理が必要であること。

このため整備基本方針では、このゾーンに対して『道南特有の自然環境を有する樹林の特性を生かし、自然林や林床植生の保全を図るほか、手入れの必要な部分には積極的に手を加えて、いきいきとした里山的自然環境の育成を図る』と設定し、この方針を実現するために、樹林管理計画の作成、ササ刈り試験の実施と追跡調査、樹林地の管理に不可欠な作業用園路の検討、植物資源再生のためのヤードの検討などを行うこととした。

このうちササ刈りについては、既往文献等を参考に(2)、99年7月に次のような試験区を異なる環境下の5地点に設定し、現在追跡調査を行っている。



(1)4月刈り (2)4月7月2回刈り (3)4月9月2回刈り (4)7月刈り (5)9月刈り
(4)(5)は1999年スタート、残りは2000年より作業開始
試験区の周囲に1m×1mの対照区を5カ所設定している

図-1 ササ刈り試験区設定状況

まだ1回目の追跡調査を行ったばかりであるが、ササは一部再生してくるものの、被圧から解放されて日照条件が大きく改善されたことを受け、種数、株数共に増加しつつある状況が観察されている。

4. 運営管理への模索

本公園では、基本構想検討時から地元の各種団体や一般市民を交えて意見交換を進めてきたが、99年にはその名称を体験懇談会と変更し、更に今年度からは地元函館市、函館青年会議所も加わった実行委員会によって体験会が運営されることになった。

これは単なる意見交換会に終わらせず、次のような数々のねらいを持ったものとなっている。

- 1)基本方針にもうたわれている『里山的自然環境の育成』のためには、具体的にどのような作業が必要であるかを実際に体験する
- 2)間伐などによって発生する植物資材からクラフトを作ったり、草原で虫取りやネイチャーゲームをすることにより、大人から子供まで身近に自然とふれあえる機会を作り出す
- 3)自分たちが実際に手を加えることにより、樹林内の自然環境にどのような変化が生まれてくるかを観察する

4)自然とふれあう機会を出来るだけたくさん持つことにより、経験の浅い人に対して少しでも魅力を伝えられるようにする

5)間伐作業や発生材などをチップ化、堆肥化、木炭化する作業の一部を実際に体験することにより、公園作りへの参加者意識や環境学習的効果を持たせる

環境や健康、福祉などが暮らしの様々なキーワードになって久しく、市民の関心も極めて高くなってきており、公園整備にあたって当然これらへの配慮が不可欠になってきている。

このような関心の高まりを受け、本公園の持つ道南特有の空間の魅力を増大させると共に、里山的な自然との関わりを生かした運営管理システムを創りあげることができれば、市民にとって単にあてがわれる公園ではなく、自分たちの公園が出来るという期待感が生まれてくるのではないだろうか。

5. おわりに

2005年を予定している全園でのオープンまでに、樹林や林床の管理手法については、データを蓄積しながらの技術的な検討がまだまだ必要であり、市民参加のあり方についても模索の段階でしかない。

これまでのオープン＝完成、利用者⇄管理者という図式から、来園者はすべて公園作りの参加者であり、いつまでたっても完成しない公園づくりのために、この空間を利用し続けるという図式の完成に向けて、なお一層の努力をしてゆきたいと考えている。

本発表にあたって快い承諾を頂いた事業主体である北海道函館土木現業所に対して、また樹林管理・林床管理についてのご指導を頂いた函館在住の日本樹木医学会理事齋藤晶氏、北海道大学大学院農学研究科近藤哲也助教授に対して、この場をお借りして感謝の意を表する次第である。

参考文献

- (1) 北海道函館土木現業所、日本データサービス(株)(1999.3):道南圏道立広域公園動植物調査委託 報告書
- (2) 大窪久美子、前中久行(1993):野生草花の保全を目的としたクマイザサ優先群落における刈取り管理に関する研究:造園雑誌56(5) 109~114